

シューマン：幻想小曲集

原曲はクラリネットとピアノのための作品だが、他の楽器で演奏されることも多い。作曲は1849年。「柔らかく、表情豊かに」との指定がある第1曲は、情熱を秘めた内省的なフレーズで始まる。第2曲「活発に、軽やかに」では、テンポをあげてロマンティックなメロディを聴かせる。第3曲「急速に、燃えるように」は、たびたび現れる、急峻なテンポで上昇するモチーフが印象的。後半は、第1曲・第2曲のテーマを絡ませながら、華やかなフィナーレを築く。

ブラームス：ヴィオラ・ソナタ 第1番

老境に入り、創作力の減退を感じていたブラームスだが、1891年3月にマイニンゲンのクラリネット奏者リヒャルト・ミュールフェルトと出会い、再び創作のミューズが微笑むこととなった。1891年のクラリネット三重奏曲とクラリネット五重奏曲に続き、1894年に生み出されたのが2つのクラリネット・ソナタ。一般的にはこの2曲がブラームスの最後の室内楽曲とされているが、実はヴィオラのための編曲がそのあとになされている。初演は2曲とも、ミュールフェルトとブラームス自身により、1895年1月7日にウィーンで行なわれた。

ソナタ形式の第1楽章は、いかにもブラームスらしい渋いテーマで綴られる。第2楽章では、陰影に富んだ叙情がゆったりと奏でられる。三部形式の第3楽章では、レントラー風の華やぎが一瞬、顔をのぞかせる。そして Rond 形式の終楽章に至り、清涼感と寂寥感を交錯させながら曲を閉じる。

シヨスタコーヴィチ：ヴィオラ・ソナタ

シヨスタコーヴィチ最後の作品で、死のわずか4日前（1975年8月5日）に完成した。シヨスタコーヴィチの多くの弦楽四重奏曲を初演したベートーヴェン弦楽四重奏団の二代目ヴィオラ奏者フョードル・ドルジーニンに献呈され、レニングラードでの初演もドルジーニンがヴィオラを弾いた（ピアノはミハイル・ムンチャン）。

作曲者の示唆によると、モデラートの第1楽章は「短編小説」。ヴィオラのピツィカートによって開始される冒頭部分は、ベルクのヴァイオリン協奏曲に酷似している。アレグレットの第2楽章では、第8場までスケッチとして残された未完のオペラ《賭博師たち》からの抜粋が用いられている。アダージョの第3楽章は「ベートーヴェンへのオマージュ」。ヴィオラのモノローグのあと、《月光》ソナタを想わせるアルペジオがピアノによって奏でられる。その後、最果ての地に行く音の対話が続き、最後は人が息を引き取るように終曲する。